
堂々乙女と秘密の美女ー記憶の中のあなたー

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堂々乙女と秘密の美女ー記憶の中のあなたー

【Nコード】

N8053N

【作者名】

榛名屋 忍

【あらすじ】

主人公はキャンパスライフに心を躍らせ、毎日楽しく過ごしていた大学一年生の女の子。付き合っていた彼から別れを告げられたその日、彼女の運命は大きく動き始める。次々と現れる協力者たち。彼女を取り巻く人々の記憶は、彼女を何処へ誘うのか。

堂々乙女失恋す

幸せなんて嘘つきです。今日は私、もう何も信じられないとばかりに大声を張り上げて参りました。キャンパス中に響き渡るこの世のものとは思えぬ絶叫に、皆さん目を白黒させながら、しかし何事もなかったかのように歩いて行きました。

幸せだなんて、大法螺吹きの云うことでしょう。まことしやかに伝えられる噂など気に留めていなかった私も、彼の本音を耳にして、遂に堪えられなかったのです。

哀しい哉、棄てられた女と見下され、無我夢中で歩き続け、いつの間にか辿り着いたのは大学から二駅も先にある小さな商店街のカフェーでありました。

昨日までの私は万人に認められるほどの幸せ者でありました。彼は私をこれでもかと愛でてくださいましたし、私もまた彼に愛の言葉を返しておりました。彼の人は幸せ者というのが口癖のようで、その幸せの根源こそ私だと確かに申しておりました。

皆さん口を揃えて年相応の付き合いが出来ておらぬと言いました。私たちはただ大学のキャンパス内でのみ逢う間柄でありましたから、子どもの遊びと称されても仕方のない関係であつたかもしれせん。しかしながら愛は形式とは別のところに本質があるのであります。私は彼を信頼しておりました。しかし、恥ずかしながら、私は自らの至らなさを認めざるを得ません。なぜなら、私を取り巻く皆様方の助言は当たっていたのです。

これぞまさに失恋。キャンパスライフを始めて間もない私はとてもなく大きな壁にぶち当たりました。唯一誇るべきは一滴の涙も流さず、彼の元を去ったことでしょう。

私は歩き疲れていましたのでカフェーに入りました。カフェーに

は若い男女が一組居りました。私は此処でも大声を張り上げたい願望に駆られましたが、あまりにもはしたなき欲望ゆえにくつとこらえ、店の奥にある席へと闊歩致しました。せめてその足音だけは響かせて。

席につくと、初老のマスターがカウンターを出て歩いて参りました。丁寧なお辞儀のあと、マスターは冷水に満たされたグラスと温められたおしぼりをテーブルに配置し、使い古されたメニューを広げました。

「かなりお疲れですね、ゆっくりしてってください」

「ブレンドコーヒーを一つください」

私は古ぼけた文字を指差しました。店主オリジナルのブレンドコーヒー。この店でなければ決して味わえないフレーバーなのです。通りの向こうで繁盛している大手チェーン店とは訳が違うのです。マスターはまた深々とお辞儀をしてカウンターに入っていきました。遠くの男女は煙草の煙に囲われて、色彩を失ったように見えました。女性の顔はこちらからはつきりと見えます。なんということでしょう、その女性は先ほど写真で目にしたばかりの、彼の想い人でありました。

噂に違わぬ類い希なる美貌の持ち主。絹のごとく白い肌、漆黒の髪は艶めいてそつと肩にかかります。私は声を失うとはこのようなことであるかと確信致しました。

「ブレンドです」

知らぬ間にマスターが私の目の前に立って居りました。

「ありがとうございます」

私はカップを受け取りました。マスターはお辞儀をしてさつとカウンターに戻り、壁に並んだ白いカップを磨き始めました。

私はコーヒーを口に含みながら、あの男女を見ておりました。男の煙草は一本、また一本と消費され、女性の白い肌を濁らせていく

ように見えます。女性は仕舞いに涙を流し、立ち上がりました。私に近づいてきたのであたふたとしましたが、単に化粧室を目指しているだけのことでした。

男は煙草を灰皿に擦り付け、女のバッグに手を伸ばしました。男は中から携帯電話を取り出し、開こうとしています。私は堪えられなくて、思わず声をあげました。

「何をしているのですか？」

男は遠くから見てもわかるような鬼の如き形相で私を睨みつけると、携帯電話をフロアに落としました。そして「ちっ」と舌を打って、前に向き直りました。

そこにマスターがやってきました。マスターはグラスを手に持って、男の前に立ちました。そして、ひと思いに顔目掛けてグラスの冷水を放ったのです。

衝撃の瞬間はあの女性も目撃しておりました。女性は驚いた様子で立ちすくみました。男は一瞬の沈黙の後、マスターに殴りかかりましたが、マスターはさつとかわしました。なんと身軽なものでしょう。

「何だよ、この店。警察呼ぶぞ」

「呼びたければ呼べばいい」

男は黙っておしぼりで顔を拭き、千円札をテーブルに置いて店を出てしまいました。

立ち尽くしていた女性は私とマスターにお辞儀をしました。

「どうもお騒がせしました」

テーブルの下にある携帯電話を取ると、女性は店を出ようとした。

「お嬢さん、千円は貰い過ぎだ。もう一杯如何かな？」

マスターはカップを指差して言いました。

「私がお供しましょう」

私が言くと、女性は天使のように微笑みました。

「ありがとうございます、頂きます」

こうして私はその女性・栖川優さんとお話を楽しむことになったのです。

「栖川優さんですね」

席について早々、私は切り出しました。彼の人の思い人である彼女。何か知っているのではないかと思っただのです。

「えっ、私のことを知ってるの？」

落ち着かない様子で彼女は水に手を伸ばしました。

「私も優秀大学の学生なんです。」

「実は私も、知ってるのよ、貴方のことは・・・」

水を口に含んで、彼女は呼吸を整えたようでした。

「私はそんなに目立たないのに、覚えてくださってるなんて・・・」

私はとても嬉しい気持ちになりました。心配りの出来る優しい女性こそ伴侶とするに相応しい存在と云いますから、その人気も頷けます。彼の人が想うのも無理はないでしょう。

「貴方はいつも元気に登校してくる。よく見かけるの。私は最近、ちよつとブルーになることが多いから、羨ましいな。」

彼女は顔を少し上げて微笑みました。マスターは静かにコーヒ―を置いていきます。私はぎこちない笑みを浮かべました。

「で、でも、私はもう、元気じゃいられないんです。」

「何かあったの？」

「ふられてしまったのです、恋人に」

「恋人って？」

しばらく沈黙した後、思い切って私は話すことにしました。

「五十嵐先輩です」

「五十嵐先輩ね、知ってるわ」

「先輩は、栖川さんのことが好きだと話していらっしやいました。お二人の関係は・・・？」

「ただの知り合いといったところね。」

優さんの仰ることは予想済みでした。大抵皆さんそう仰います。しかし、それは親密な関係にあるという意味でありましょう。

「先輩にはもう連絡しないでって言ってるの。本当にしつこいから、さっきの彼にも相談していただけど、うまくいなくて。もう、大声を張り上げたい気分。」

「私もですっ」

「ふふふ。ただどね、五十嵐くんにはたくさんの恋人が居たのよ。教室、サークル、飲み会…場所が変われば女も変わる。彼はそういう人なの。ふられて正解だわ。」

「でも、あなたは違うのでしょうか？」

「さあ、どちらにせよ、期待に応えることは出来ないけど。」

優さんはコーヒーを口に含み、ため息をつきました。これがまた色っぽく、男性を虜にするのがよくわかります。

「いつそのこと、あなたのような人と付き合いたいわ」

唐突に優さんは言いました。洗練されたジョークは淑女の嗜みでありましょう。私は感服致しました。

「冗談もお上手なんですね」

「ふふふ、あなたとは気が合いそうだね。よかったら家に来ない？ 晩御飯をご馳走するわ」

「喜んで！」

私たちはマスターにもう一度お礼をした後、優さんのアパートへと向かいました。

美女の秘密

彼女の住むアパート「ハイツ・テラマチーノ」は大学から歩いて10分ほどの位置にありました。名前からも解るとおり、古くからお寺が密集する町に建てられた学生向けのアパートでした。何とも安易な名付けだなあとはいつつ、口にはしないことにしました。

「入って」

思いのほか殺風景な室内はモノトーンに統一されていました。洗練された淑女の部屋には薔薇や百合が似合いかと思いましたが、洗練された淑女こそシンプルなものが似合うのかも知れません。優さんは靴を脱ぎ、裸足のままりビングに向かいます。私もスニーカーを脱いで後を追いました。

「着替えてくるわね。座ってて」

私は白い卓袱台のそばに正座して待ちました。はしたないとは思いましたが、周囲を見回してみることになりました。壁のカレンダーには細い字が並び、私の知らない本やCDが本棚に納められ、美しく並べられていました。本棚の上に飾られた写真には弟さんと思しき美少年が写っています。白い肌、短く切り揃えられた黒髪、細く長い腕、長い脚……どこをとっても文句のつけようがありません。さすが栖川さんのご兄弟。

感心しているとドアが開いて、彼女が出てきました。化粧を落とし、髪を一つに束ね、黒いジャージに身を包んだ彼女は、まるで……

「あの写真と同じ？」

「そう。あなたなら信賴して、全て話せると思って。」

「栖川さんは……男性なのですか?!」

「そういうこと」

これは一大事です。私は知らぬうちに殿方の家にあがってしまったのです。私は立ち上がり、ズザザという効果音が当てられそうな勢いで後ずさりしました。

「わ、私ははしたない女にはなりたくありません！殿方の家にあがるにはそれなりの段階を踏まねばなりません！！」

「そ、そうだよな？ごめん。ただ、どうしても今、あなたの力を借りたくて」

「私の力を？」

「そう。僕に力を貸してくれないかな？」

私と距離を保ったまま、彼女、いえ、彼は言いました。

私は何もわかりませんでした。大学のアイドル栖川優さんが男だなんて、誰が信じるでしょう。それに初対面の男性の家に簡単に上がり込むとは、私はなんと愚かなのでしょうか。これはまさに大声をあげたくなるような事態ですが、私はぐっと堪えました。彼にご迷惑をおかけすることになるでしょうし、何より大声を上げるなどというはしたない行為を一日に二度も行うのは、私自身耐えられないのです。

「説明を頂ければ、ご協力致しましょう」

私は思いました。この事態は案外と面白いかもしれません。学園のアイドル・栖川優の秘密を私だけが知っている。秘密とは甘美な響きです。彼女、いえ、彼に協力すれば、私は幸せを失ったことさえ忘れ、再びキャンパスを闊歩できるでしょう。彼の秘密はそれほどまでに大きな力を持っていると感じさせたのでした。

「桐原悟」

彼は一枚の写真を差し出して言いました。短めの黒髪を遊ばせて、ポロシャツにシルバーのネックレス、腕には似合わない大きな時計。それはあのカフェーで見た煙草男でありました。

「カフェーに居た人ですね」

「そう。僕の親友なんだ。」

「親友……？けど、あの時はいがみ合っているように見えました。」
彼は悲しげな表情で小さく頷きました。

「僕は高校時代、いじめを受けて転校したことがあるんだ。その転校先に悟がいた。悟は幼稚園のクラスメートで、お互いうつすらと覚えていて、意気投合したんだ」

彼は卒業アルバムを棚から取り出しました。確かに集合写真には二人が仲良く並んで写っています。

「栖川さんはこの頃から長髪なのですね」

「演劇部の役作りで伸ばしていたんだ。」

ページをめくると演劇部の写真を見つけました。妖艶な美女が日本刀を携えて仁王立ちをしております。さぞ優美な演劇でありましよう。栖川さんはどこからどう見ても女性です。

「僕は演劇で有名なこの大学をずっと目指していたんだ。それなのに、いじめのリーダーだった先輩がこの大学に入学してしまった」

優さんはアルバムを閉じて俯きながら話を続けました。

「どうしようかと悩んでいた時、悟が女装作戦を思いついた。優なんて名前の女はいくらでもいるからバレないだろうって」

彼はクローゼットも見せてくださいました。そこには女性もののドレスシャツやスーツが納めてありました。

「姉が雑誌のモデルをしていて、譲ってもらったんだ」

「不審がられませんでした？」

「僕は演劇部でいつも女役をやってたから、姉も慣れてしまったんだろっね」

彼の照れ笑いはやはり女性的で、まるで天使のようでしたので、私はまた同性と話しているような錯覚に襲われました。

「その、いじめのリーダーというのは？」

「五十嵐だよ」

「えっ」

そこに挙がったのは彼の人の名前でした。

今日は本当に驚くことばかりです。なんと彼の人は学園のアイドルを苦しめ続ける悪党だったのです。そんな男とつき合うとは、な

んと見る目のない女でしょう。私はまた恥ずかしく、穴があつたら入りたい願望を抱きました。

「正直、同じ講義を受けるのは苦痛だよ。バレやしないかとヒヤヒヤする」

「あの、彼は栖川さんのことが好きって……」

「そこが不思議なんだ。」

彼は首をひねりました。

「この間講義のあとに呼び止められて、遂にバレたと思ったたらデートの誘いだった。バレなかったのはよかったけれど、付き合うわけにはいかないし、かといって冷たく当たると何をされるかわからないし……」

男の栖川さんはいじめていたというのに女になったら恋愛対象とは可笑しな話ですが、万が一にもそれが作戦だったとしたら、何とも恐ろしいことではありませんか。私も、もう元の関係には戻れません。

「さつきは喫茶店でそのことを相談してた。悟は自分が彼氏役をやれば五十嵐が諦めるだろうって言う」

「名案ではありませんか！」

「いや……僕もずっと女じゃ居られない。いつか男に戻ったとき、今度は悟が都合悪いだろう？」

「悟さんは優さんのことをどう思ってたっしやるのでしょうか……」

悟さんは考えつかれたという様子で、渋々口を開きました。

「親友がどんな趣味を持っていたてもそれは自由だと思うよ。だけど、正直よくわからないんだ。ちゃんと同性として見てくれているのか」

しばらくの沈黙の後、再び彼は語り始めました。

「悟との関係が崩れるのも嫌だけど、五十嵐先輩にもバレたくない。それで、あなたに何か良いアイデアがないか聞きたかったんだ」

「なぜ私に？」

「いつもあなたは堂々と学内を歩いてる。僕もあなたみたいに堂々と歩きたい。そう思った。だから……」

私はじっと思索してみました。自分が堂々としている理由などはつきりとはわかりませんし、仮にわかったとて彼が実行できるのかもわかりません。しかし、私は何とか優さんの力になりたかったのです。

「私と一緒に行動してみても如何でしょうか」

「一緒に？」

「私のあとをついて歩けば、自然と元気に歩けるようになるはずですよ」

それが私の出した一つの答えでありました。

「そっか。じゃあ、明日からやってみようかな」

優さんは小動物を見るような目で私を見つめました。そして、携帯電話の番号を交換して、この日は別れたのでした。

とにかく今日は様々な経験をいたしました。夜風に吹かれながら、私は一日を振り返りました。いつものように彼をランチに誘おうとしていたところ、彼から突然別れを告げられ、私はショックのあまり、何をするつもりであったかも忘れ、大学を飛び出してしまいました。

行く宛もなく歩き続け、たどり着いたカフェーでは大学のアイドル栖川優さんと出会い、「彼女」のアパートで「彼」の秘密を知ってしまいました。これほどまでに変化に富んだ一日が、この先も待っているのでしょうか？ 私にはまだ何もわかりませんでした。

彼女の作戦

次の朝、7時30分に栖川さんのアパートを訪れました。どういった方法で合流し、共にキャンパスを闊歩するのかについて、全くもって決めておりませんでした。夜間のメールなど失礼極まりないと思い、私はおそらく皆さんが起きるであろう時間に合わせて伺ったつもりでありました。念のためチャイムは鳴らさず、小さく戸を叩いてみました。すると彼はそれに気づいて戸を開けて下さいました。

「おはよう、早いね」

彼はまだジャージ姿で、男性モードでありましたから、私は部屋にあがるのを躊躇しました。

「すぐ着替えるから、玄関で待っていてくれるかな？」

私はそれならと思い、中に入りました。

「邪魔します」

彼は遠くでバタバタと音を立てながら支度をしています。

「すみません、早くて」

「いいんだよ、僕も起きていたから。でも、アパート寄ってもらって遠回りじゃない？」

「私は電車通学ですから、こちらのアパートは通り道です」

私は堂々と答えました。

「実家から通っているの？」

「ええ、親が電車で通える大学にきなさいと」

「どれくらいかかるの？」

「二時間くらいでしょうか」

「遠いねえ」

彼は驚き、大きな音を立てました。椅子か何かが倒れたのかもしれない。

「じゃあ、昨日は大丈夫だった？結構遅かったよね」

「終電には間に合えば問題ありません。眠ってしまっても、終点で起こしてもらえますから」

私が照れ笑いをしながら答えると、彼はまた驚いて声を上げました。

「終点って…麓駅まで乗っているの？」

「はい。」

麓駅というのは私の住む麓村の中心にある駅です。私の家からは徒歩五分と便利な駅なのです。

「すごいなー」

言いながら優さんが姿を現しました。ストライプの入ったドレスシャツに黒のパンツを合わせ、手には有名ブランド品と思しきジャケット、胸には光り輝くダイヤのネックレス。これぞアイドルの姿です。私が見とれていると、優さんは恥ずかしそうに視線をそらしました。

「麓村からは下宿している人が多いでしょう？」

「おそらく電車通学は私一人かと思っています」

「さすがだね」

なぜか優さんは笑っていました。その顔はすでに女性でした。私はじっと見ているのははしたないと思いながら、やはり見てしまうのでした。

大学までは歩いて10分ほどで、人間学部の門をくぐると正面に時計塔が見えました。このアプローチこそ闊歩するにふさわしい路です。私は力いっぱい歩きました。

「栖川さん」

「優で良いよ。」

「じゃ、じゃあ、優さん、あの、専攻は…」

「私は人間文化専攻。あなたは？」

「人間社会専攻です」

「…経済学とか法学とか？」

少し思案して彼は呟きました。自分の専攻以外のことはよく解らないのが普通なのです。

「はい。でも私は人類学というのが気になっているのです」

「人類学？」

「人類を学ぶとは崇高な学問ではありませんか！私は人間学部という名にありつたけの思いを馳せて入学しました。そして今は人類学に興味津津なのです」

「やっぱり面白いね、あなたといると」

優さんはまた微笑みかけて下さいました。満足げな表情に私は安心しました。門から校舎までのアプローチを二人で闊歩することに、優さんは楽しさを覚えたようでしたから。

続けて私たちはふたり並んで朝の授業を受けました。一緒に授業を受ける人たちは珍しいものを見るような表情でしたが、私は何も気にしないことにしました。

授業が終わると優さんにメールが届いていました。

「悟」

あまり嬉しくなさそうな顔をなさるので、私は声をかけるべきか悩みました。

「お昼食べよっか」

優さんは携帯をしまい込んで席を立ちました。

「はいっ」

私は返事をして、優さんがさつと教室を出て行くのを追いかけようとしました。しかし、それは叶いませんでした。彼―五十嵐先輩に腕を掴まれたのです。

「お前、栖川と仲良いのか？」

「はい」

私は社交辞令的に答えて腕を振り払いました。先輩とは言え、全く無礼もいいところですよ。

「待て待て。栖川に彼氏はいるのか？」

「知りませんっ」

私はもう応える気などありません。私は急いで優さんを探しました。遠くに見えたのはあの煙草男と話す優さんのお姿でした。大変です！優さんがピンチかもしれません。私は陰に隠れて聞き耳を立てることにしました。

「優、メール見たか？」

「うん」

「バイト先の先輩からもらったんだ。」

煙草男・桐原悟が出したのは遊園地のチケットでした。私もよく知っている、有名な遊園地。一度は行ってみたいと思っていた憧れのキャンディパークです。

「いいなあ」

私は思わず口走ってしまいました。

「何だよ、お前」

煙草男はギロリと睨みました。優さんはびっくりした様子でこちらを見ています。

「悟、私の友だちよ」

「ふうん。まあいいや。明日は遊園地で……」

「私も行きたいです！一人で行くのは面白くないので、お二人にお供します」

私は煙草男の言葉を遮って声を張り上げました。煙草男のペースに乗せられてはたまりません。

「優、コイツどうにかしろよ」

「一緒じゃだめなの？」

優さんの台詞に煙草男は機嫌を損ねます。

「チケットは二枚しかないんだよ」

「私は正規の料金をお支払いします！」

負けてはいられません。何としても舌戦で煙草男を倒さねばならないのです。私はわがままな女のふりをしました。

「優さんと先に遊ぶ約束をしたのは私なのです。横取りはひどいと

思うのです!」

「そんな話聞いてねえよ」

「ホントよ」

優さんはナイスなタイミングで応えてくださいました。これには煙草男もタジタジです。

「先に言えよ、優」

「ゴメン」

「では私もお供していいですね?」

「好きにしろ」

煙草男はイライラした様子で煙草を取りだそうとしました。すると、そこに通りかかった風紀委員が煙草男の腕を掴みました。

「全館禁煙です」

「うるせーな。わかったよ」

取りだそうとした煙草をポケットに戻し、煙草男は風紀委員を睨みつけました。しかし、風紀委員も負けてはいません。

「次は学長室送りですからね」

風紀委員が去ると煙草男は優さんの方を向きました。

「明日は9時にうちに来い。バイクに乗せてやるから」

「ふたりしか乗れないじゃない」

「あいつは勝手についてくるんだろ。現地集合・現地解散だ」

煙草男はそう言い残して姿を消しました。次の授業に急ぐのでしよう。

「桐原さんは他学部ですか?」

「悟は工学部だよ」

工学部と人間学部は校舎が離れていますから、来るも帰るも大変でしょう。しかし、敵に情けは無用です。私は煙草男など許さないのです。

「バイクに乗るのか」。面倒くさいな」

優さんはため息をつきました。ならば私にも妙案があります。私は優さんに耳打ちしました。優さんは驚いた様子でしたが、につこ

りと笑ってくださいました。

とにかく明日は楽しいことになりそうです。私は午後の授業のことなど忘れてしまいそうくらい、ドキドキしているのです。

真相の遊園地デート

私は午前9時、マンション・エリザベス寺町の前にいました。そのマンションにはあの煙草男こと桐原悟さんがお住まいなのです。優さんには煙草男のバイクの後ろには私が乗ります、と提案していたのです。優さんは快く煙草男の住居を教えてくださいました。どうせならピンポンダッシュをしたかったのですが、高級マンションゆえ、そのような危険を侵すことは叶いませんでした。

9時を過ぎて、黒いジャケットでバツチリ決めた煙草男がやってきました。サングラスの下では相当驚いた表情をしていることでしょうか。

「なんでお前が・・・」

「優さんは少し遅れるのでバスでいらつしやるそうです」

「じゃあお前もバスに乗れよ。友だちだろ。」

「優さんはせつかくの機会なので悟さんのバイクに乗ってみたらと提案してくださいました」

「ふざけんなよ！」

煙草男は今にも殴りかかりそうな勢いです。私は膨れっ面を見せました。

「いいんですか？暴力振るわれたって、優さんに言いつけちゃいますよ」

「ちっ。乗れよ」

嫌々ながら煙草男は私にヘルメットを渡し、バイクを指差しました。優さんのこととなると煙草男も弱いものです。私は生まれて初めてバイクの二人乗りを体験致しました。

キャンディパークの正面ゲートにはすでに優さんがお待ちでした。煙草男はすぐに駆け寄ります。

「優、ざけんなよ」

小声でも聞き取れる怒りに満ちた声に私は嫌気がさしました。し

かし、そう言つては居られません。今日は煙草男から優さんを全力でお守りするのです。私は準備万端でした。

ジェットコースターにコーヒーカップ、お化け屋敷にメリーゴーランド。そこは俗な言い方をするなら「ベタな」遊園地でありました。とりあえず私たちは全ての遊具に乗ってみることにしました。すぐに溶けるソフトクリームや、味の割に高いランチメニューなど、遊園地の醍醐味も味わいました。

夕暮れ時が近づいて、残る遊具はただ一つ、大観覧車のみとなりました。一大イベントと言うべきでしょう。カップル専用の列に煙草男が並びます。私もついていこうとしましたが、一般の列に引き戻されてしまいました。優さんと煙草男は二人きりで観覧車に乗り、私は一人、その後を追いかけることにしました。

「やっと二人きりになれたな、優」

「悟…何をするつもりなんだ？ふざけるのもいい加減にしてくれよ」二人が接近する様子を隣のゴンドラにいた私はしっかりと見ておりました。これぞまさに優さんのピンチです。私は非常用扉をあけました。すると大音量でブザーが鳴り、ゴンドラが止まりました。

「何が起きたんだ？」

悟が顔を上げると、優は勢いをつけてその頬を殴った。

「もうたくさんだよ！」

優が吐き捨てる。それはいつかの演劇で見たような、鬼の形相だった。

「待て、落ち着け！何があつたんだよ！」

優は何度も悟の腹部を目掛けてパンチを繰り出した。悟がしゃがみ込んで蹴りを入れ続ける。ゴンドラは激しく揺れていた。

私は点検用と思しきはしごで揺れるゴンドラを目指しておりまして。ようやくたどり着いたゴンドラでは二人が殴り合いの喧嘩をし

ています。これは許せません。私はゴンドラの非常用扉を開けて中に入りました。

「婦女暴行許すまじ！」

私がゴンドラに入ると、予想外の光景が広がっておりまして。なんと、殴られていたのはあの煙草男だったのです。

「どう見ても婦女暴行じゃねえだろ。そもそも優は女じゃねえし。テメエは知らないかもしれないが、こいつは男だ。」

床に座り込んだまま煙草男がものすごい剣幕で言いました。

「そんなこと、知ってます」

「そうか、こいつには話してたかあ。つまり、こいつがお前の好きな……」

最後まで言う前に、優さんは煙草男を殴りました。煙草男は降参とばかりに床に寝ころんでいます。何と言うことでしょう。

「いくら何でも、暴力はいけません！」

私は優さんの両腕を掴みました。それを優さんは振り払います。

「悟は五十嵐くらい質が悪い。これくらい当然だ。ずっと信じてたのに、結局みんな、僕のことなんか……」

いつもの温和な表情とは明らかに違う恐ろしい顔でしたが、私はたじろぎませんでした。

「どんなことがあったとしても、こんな方法をとるのはいけません」
殴られるのかもしれない、と私は思いました。しかし、殴られて

倒れたのは、優さんのほうでした。寝ころんでいたはずの煙草男が私の横に立っていました。

「好きな女傷つけるつもりか、バカ」

優さんは全く起き上がることが出来ません。

「お前は昔から喧嘩が苦手だったよな。役者だから動きだけは決まってるけど。あんなので倒れるか。」

「悟、手加減しろよ」

「知るか。なんだか知らないが、こっちは散々殴られたんだぜ。一発で済んで良いと思えよ。」

「だって、悟は、その、僕のこと、男として見てないんだろ・・・。」

悟さんはきょとんとしていました。

「は？」

「別に悟がどんな趣味でも構わないけど、僕は男としてちゃんと友達で居たかった」

「何言ってるの？趣味？」

「っ、つまり、」

どうもお互いに話がかみ合っていないので、私は僭越ながら口を挟むことに決めました。

「悟さんは優さんと恋人としてお付き合いがしたいのではないか、ということですよ。」

「はぁーーーーー？！」

悟さんは天井を見上げて叫びました。

「俺が？何で？何その勘違い。」

そこで私と優さんは事の真相を知りました。煙草男のことを私達は完全に誤解していたのです。

「勘違い・・・？」

「俺は男と付き合うような趣味無いから。誤解すんな」

「ご、ごめん・・・悟・・・」

そのとき、ゴンドラが再び動き出しました。完全が確認されたのでしよう。優さんが席についたので、私はその隣に腰を下ろしました。煙草男…いえ、もうそんな言葉を使う必要はありません。悟さんは立ったまま黄昏れていらっしやいました。

「優、その女のこと好きなの？」

私たちに背を向けて、悟さんは爆弾発言をなさいました。しかし、優さんは顔色一つ変えません。

「そうなんだ」

優さんはきりつとした男の顔で言いました。私は突然のことに、その言葉の意味を理解することすらできませんでした。

「でも、お前らは結ばれない。五十嵐がいるかぎり…」
「そう、だな」

ゴンドラは地上に着きました。悟さんは私の手を取りました。
「迷惑かけたな。お詫びに家まで送るよ。優は自力で帰れるよな」
「ああ。でも、この子の家は麓村なんだ。送れるか？」

「ならなおさら送らないとまずいだろ。お前、道案内できるか？」
悟さんの問いに私は小さく頷きました。

「悟、頼んだ」

「ああ、優も気をつけて帰れよ」

そうして私たちは別れました。悟さんは私にヘルメットを渡しました。

「ありがとうございます」

ヘルメットを受け取ると、悟さんはにつこりと笑いました。

「悪いな。お前、俺のこと嫌いなんだろ。それなのにこんなことに付き合わせて」

「いえ、それは単なる誤解だったのです」

「そうかい」

悟さんが煙草を吸う姿はまるで別人のように見えました。

「悟さんは優さんのこと、どう思っているのですか？」

「ははは。もしかして、まだ疑ってるの？ 優は男だって、ちゃんと解ってるさ」

「すみません、変なこと聞いちゃって」

「いや、でも、幼稚園の頃はクラス全員が女だと思いこんでいたくらいだから、初恋の人だったりするのかもな、なーんて」

バイクを走らせながら、悟さんは独り言のように言いました。

「高校で再会したときは驚いたよ。学ラン着てる姿と、幼稚園時代のギャップがすごくて。覚えていてくれたのは嬉しかったけれど、最初はどうしたらいいかわからなかった。」

お顔を拝見することは出来ませんが、きつと落ち込んだ表情をし

ていらっしやるでしょう。

「あいつが演劇で女役をやったとき、ホントに女に見えてさ。恥づかしかったけど、すごく嬉しくて。だから女装作戦だなんて馬鹿げたことを考えちゃったのかもしれない」

その蔑んだような物言いに、私は少し切なさを感じました。そして、先ほどまでの無礼を深く反省しました。

「悟さんは、優さんのこと、とても大切に思ってたんですね」

「そうかなあ。さっき思いつきり殴っちゃったけど」

悟さんは本当に元氣のない様子でした。

「ま、殴ってなきゃやってらんないよな。遊園地なんて好きな子と一度は行ってみたい場所だろ。優が女だったらって、ちよつとは思ったよ。これ、優には内緒な。」

「もちろんです」

言い終えると、悟さんは大きく深呼吸して一瞬だけこちらを向きました。そして、前を向いて続けました。

「優は君を好きだって言った。今日はそれが聞けて嬉しかった。今度ちゃんとデートしてやってくれよ」

ははは、と笑って悟さんはアクセルを踏みました。しかし、私は困惑していました。

「私にはそれがわからないのです。優さんは私のことを好きだと仰った…。それは本当なのでしょうか？」

すぐに悟さんは答えました。

「あいつは簡単に嘘をつくような奴じゃないよ」

その声だけはとても力強く、二人の絆を表しているものと思われました。

「どちらにせよ、悟さんの仰るように、五十嵐さんをどうにかしない限り、優さんは幸せになれないですね」

彼の人が優さんの正体を知れば、何が起こるかわかりません。暴力を振るわれたり、脅されたりするかもしれません。とにかくとても危険なのです。その点、優さんが女装をしているというのは安心

すべき事でしょう。優さんと私の関係は女友達に見えます。もし悟さんが協力してくださるなら、彼氏作戦も可能かもしれません。

但し、それはリスクを伴います。危険人物たる彼は、悟さんにも暴力を振るうかもしれません。また、万が一正体がバレた時には、二人の関係の怪しさが問題視されることでしょう。とにかく、彼の人は諸悪の根源なのでした。

「俺は少々危険を侵したって二人に協力するよ。二人には迷惑かけたら」

「ありがたきお言葉です。あ、次の交差点は右折です。」

「OK。かなり山の中に入ってきたな」

「もうすぐ麓村に入ります。バイクでは1時間でここまで来てしまいうですね」

これは私がいつも2時間かけて列車に揺られている距離なのです。バイクは素晴らしい乗り物だと思います。

「線路がかなり遠回りしてるんだろ。途中で他の路線と接続しなきゃいけないからさ。それにこのあたりは起伏が激しいから…」

「鉄道オタクさんみたいです」

私は思わず笑ってしまいました。

「…わかった？でも、優だって幼稚園の頃は新幹線マニアだったぜ」「そうなのですか。鉄道オタク人口は思ったより大きそうですね」

「ほら、駅が見えてきたぞ」

悟さんが指を差します。

「あ、ありがとうございます。それでは、ここで」

「家まで送るよ、迷惑じゃなければ」

「は、はい。ではその角を左折してください」

私の家が見えてきました。電気のついていない、大きな家。昔ながらの農家のお屋敷。それが私の家なのです。

「親は出かけてるの？」

「いえ、私は一人暮らしなんです」

「この家で？」

悟さんは驚いているようでした。無理ありません。確かに我が家は独りで住むには大きすぎます。

「両親は仕事でいろいろな街を転々としていますし、祖父母は今や高級老人ホーム住まいです。私はこの家を守らねばなりませんので、ここに暮らしております」

「そうなんだ」

バイクが家の前に停まりました。私はヘルメットをとって、悟さんにお渡ししました。

「本当に今日はありがとうございました。」

「ああ、こっちこそ。泥棒とか気をつけろよ」

バイクはまたゆっくりと、来た道に戻っていきました。私はその姿が見えなくなるまで、手を振り続けました。

美女の勸

あの子と悟が帰るのを見送って、遊園地からバスに乗る。大学まで20分ほど乗ればいい。今日は波乱の一日だった。悟って、悪い奴じゃなかったんだな。殴って悪いことをした。ダメージはなかったみたいけど。

元はと言えば、僕が小さい頃、姉のお下がりを着ていたのが間違っていたのだ。クラスメートから女と勘違いされ、のちにオカマと馬鹿にされた。五十嵐だって、その類だろう。

バスがテレビ局の前に停まったとき見覚えのある後ろ姿が目に入った。

「あら、優じゃない」

「姉さん！」

それは姉の佳恋だった。スタイルの良さを生かして雑誌の専属モデルをしているのだが、最近はお天気お姉さんもやっているらしい。「今日は優」ちゃん」なのね。その服似合ってるわよ」

姉は僕の隣に座る。

「ありがと、でいいのかな」

「いいんじゃないの？それから、今晚泊めてくれない？」

「唐突だなあ」

姉にはよくあることだ。実家までは新幹線に乗れば二時間とかからないが、明日は休みだからこちらに泊まったほうがいいのかもしれない。

「食事は私が作るから」

「わかった。いいよ」

「サンキュー」

家に帰ると姉が鍋を用意した。冬でもないのに、と思うかもしれないが、これが姉の得意料理なのだ。姉と二人、鍋を囲んだ。

「彼女できた？」

鍋をつつきながら姉が言う。

「また唐突だなあ…。できてないよ」

僕はジャージ姿の男モードで応えた。

「じゃあ彼氏は？」

「男からはデートに誘われたよ」

「いいなあ」

「いいわけないだろ。姉さんだって誘いならいくらでもあるだろうに」

僕は不満とともに「ご飯をかきこんだ。

「冗談だって。でも、好きな子くらい居るんですよ」

「…」

「居るんだあ…。どんな子？可愛い？それともクールな感じ？」

「…変わってる、かな」

「へえ、今度紹介しなさいよ」

姉と笑いあっていたら、なんだか明日からも頑張れる気がした。

「優、その女のこと好きなの？」

悟にそう問われて、僕は「そうだよ」と答えてしまった。心の準備もないままに、彼女の前で言ってしまった。彼女はこれまでのように僕と接してくれるのだろうか。まだ五十嵐とのことも決着が付いていない。そちらが解決してから伝えようと思っていたのに。

連絡先は聞いたのに、こちらから連絡する勇気がない。向こうからくることを期待した。彼女はあんなに堂々としているのに、自分はコソコソと意気地のないことを続けている。

「優、ケータイ鳴ってるよ」

鍋の片付けも済んで姉はDVDを観ているところだった。僕はリビングルームにケータイを置いたまま部屋のベッドで横になっていたのだ。

「今日はありがとうございました。また一緒に出かけましょう」

彼女からのメール。そして、悟からも。

「麓村に着いた。これから帰る。彼女大事にしるよ」

ありがとうを言うべきなのは僕のほうだ。僕はニヤニヤと笑っていたのだろう、姉が怪訝そうな目をしてこちらの様子をうかがっている。

「イイコトでもあった？」

「…」

「そう、よかったわね」

姉にはお見通ししかった。

「こちらこそ、今日はありがとう。これからも、仲良くしてもらえると嬉しいです。」

気の利いたことは書けないけれど、メールを書いてみた。そして送信。すると、すぐに返信があつた。

「こつちこそ、色々迷惑かけてゴメン。今度食事でもおごるわ。」

悟

…悟？僕は送信先を間違っていた。慌てて正しいアドレスにメールしたけれど、返信はなかった。少し不安ではあるが、先ほどの僕のように遠いところに置いていて気づかないのかも、と自分を安心させることにした。

このとき、すでに彼女は眠りに就いていたという。一日の疲れを癒すため、午後9時、彼女は布団に入ったのだった。

「彼の人」と私

人が人を好きになるのは、ごく自然なことでしょう。悟さんが小さい頃、優さんを女性と勘違いして好きになったのだとしても、解らないことではありません。しかしながら私は、私を好きだと言った優さんの真意が未だわかりません。五十嵐先輩は、どちらかと言えばわかりやすい人でありました。なぜなら彼の人は私を「幸せの根源」と称していたからです。

私たちの出会いは4月のある日。私は始まったばかりの大学生活に慣れようと必死でありました。その日、学生食堂で何を食べようか迷っていたところ、私は財布を忘れたことに気づいたのです。私にはお金を借りる相手がいなかったため、絶望的な気持ちになりました。

その時目にしたのは「大食いコンテスト」の看板でした。30分以内にラーメンを5杯食べることができたら、学生食堂利用券1万円分が頂けるというのです。食べきれなかったら2000円とありますが、私には食べきる自信がありました。

私はコンテストに参加しました。参加者の一人は五十嵐亮といいました。彼は私の隣に座りました。金のウルフヘアにチャラチャラとしたアクセサリ。周りで似たような学生が彼をやし立てています。かなりの人気者なのでしょう。

「亮、1万円もらったら昼飯奢れよー」

「じゃあ食べきれなかったらお前らが罰金払え」

「亮ならいけるって」

私は少々不快でした。明らかに私とは住む世界が違うと感じたのです。

各人の前に5杯のラーメンが運ばれ、合図とともに食べ始めました。なんとおいしいラーメンでしょう！私はすぐに1杯目を完食致

しました。20分経過したところで、私はラーメンを食べきりました。他の方は苦戦しているようです。審判を務める食堂のおばちゃん、なんと厨房で調理に追われています。私は困惑していました。隣にいた五十嵐さんは残り2杯となっていました。もう限界のようで、食べようとしません。私はもったいないと思いました。

「食べないのなら食べて差し上げます」

「えっ、マジ？」

五十嵐さんは一杯を私に託し、もう一杯に箸をつけました。そして10分後、それぞれラーメンを食べ終えました。

「その二人、完食おめでとう！賞品だよ」

私と五十嵐さんは賞品を頂いてしまいました。五十嵐さんはバツが悪そうでした。五十嵐さんのご友人も彼を責め立てます。

「あれはズルだろ」

「1万円は彼女のもんだ」

私は気にしていなかったのですが、彼は気にしたようでした。

「あの、さっきはありがとう。よかったら、今度一緒にランチでもどうかな？奢るから」

「は、はい」

それが彼との出会い。私達はいつも一緒にランチを楽しみました。彼は「君と一緒に食べると楽しい気持ちになる」と言ってくださいました。私は人は見かけで判断してはならないと学びました。

しかし、それは大きな間違いでした。彼は気になる女には次から次へと声をかけ、何人も恋人をつくる最悪な男。そして、優さんをいじめた最低の男なのです。悟さんは彼が居る限り、優さんに幸せはないと仰いました。しかし優さんの幸せとは何でしょう。優さんは私のことをどう思いなのでしょう。私の心はいつになく混乱しているのです。

告白は早朝に

ピンポーン

日曜の午前7時30分、高級マンションのエントランスに私は居ました。

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

何度鳴らしても、返事がありません。今度は紙切れにメモしておいた電話番号を取り出して、こちらで鳴らしてみます。W攻撃です。「もしもし」

チャイムが10回以上鳴って、ようやく悟さんはインターホンを取りました。

「私です。昨日はお世話になりました。」

「…こんな早くに何の用だよ。」

インターホン越しに不機嫌そうな声が聞こえました。

「ご相談があるのですが、なにぶん列車の本数が少ないものでして」「知ってるよ、始発の次が12時だっけ。それで後は夕方までない。」

「よくご存じですね」

「まあ。で、相談があるって?」

抵抗を諦めたらしい悟さんは、話題を変えました。私は少し申し訳ないような気がしました。

「はい。こんな早くにすみません。起きていらっしやるんじゃない

かと思ひまして」

「まあ起きてたけどさ。まったく。今そのドア開けるから。」

エントランスのドアが開いて、私はマンションの内部に入りました。5階まではエレベータを使います。悟さんは軽く髪を整え急いで選んだらしい服を着て、玄関の前に立っていらっしやいました。「で？」

「立ち話でよろしいものでしょうか」

「あがるの？」

「できれば」

「ご無理をお願いしているのは承知でした。悟さんは苦笑しておりました。」

「お前さ、優の家に行ったとき、男の家にかかるのははしたないだの何だの、言ったらしいじゃないか。」

「悟さんのことは別次元なので問題ありません」

「なんだそりゃ」

悟さんが男性であることなど、今は問題外なのです。優さんと親しい悟さんに、ぜひとも話を聞いていただかねばなりません。

「高級マンションなのに、汚いですね」

部屋の中は講義ノートや食器や洗濯物が無造作に置かれていて、まさに男の一人暮らしといった様子でした。

「うるさいっ。片付けは苦手だ」

しかしながら工学部で建築を専攻されているのですから、もう少し整えていただきたいものです。

「それで建築家になれるのですか」

「ちょっと不安があると思うのですが、悟さんは胸を張っていらっしやいました。」

「人の家ならダイジョウブ。って、早く本題に入れ」

「は、はい」

私は忘れかけていた本題を思い出し、深呼吸をして話を始めました。

「優さんが、遊園地で言うてくださった言葉、あれは告白だったの
でしょうか」

「そりゃ、そうだろ」

悟さんは間髪入れずに言いました。

「出会って間もないのに、これは一目惚れというものでしょうか」

「出会って間もない？ そうなのか？ おかしいな・・・」

悟さんは首をかしげていらっしやいました。

「優はずっと好きだったって言うてたが・・・」

「そんなことはありません。私たちが顔を合わせたのは早くても今年
の春、入学式くらいです」

「ま、どっちでもいいや。優はあんたのこと好きだって言うてたぞ。
付き合ってやるのかやらないのか、早いとこ伝えてやったらどうだ
？」

「悟さんの言うことなら間違いありません。これから伝えてきます
！」

私が立ち上がろうとすると、悟さんが腕を掴みました。

「待て待て。まだ朝早いぞ。」

「そうでした・・・では、途中で食事を摂ってから伺うことにし
ます」

「おう、がんばれよ」

「はい！」

そうして私は悟さんのマンションを後にしました。

私は優さんのアパートに近いコンビニでパンを買うことにしまし
た。しかし、そこで私は見てしまいました。女性と買い物をしてい
る優さんの姿を。

「あ、おはよう。どうしたの？」

話しかけてきたのは優さんのほうでした。

「優さん・・・」

私はいつになく動揺していました。そこに美しい女性が近づいて

きます。それはどこかで見たことのある顔でありました。

「優のお友達？」

「あ、あの……」

「私は佳恋。優の姉よ」

「お姉さまでしたか。優さんにはいつもお世話になっております」

私は驚きました。優さんのお姉さまは雑誌の表紙を飾ることもあるモデルのカレンさんでありました。

「こんなところでどうしたの？」

「優さんにお聞きしたいことがあって……」

「なに？」

「いま、ここで聞いて良いものでしょうか……。遊園地でのことです」

優さんは一気に赤くなりました。

「あ、あの……」

私たちは優さんのアパートに場所を移すことにしました。

「姉さん……まだ居るの？」

「うん。面白いことになりそうだから。」

「彼女が困っちゃうよ」

「わ、私は別に……」

私は嘘をつきました。本当はとても困惑していたのです。

「さっさと言っちゃいなさいよ。あんたも何年心にため込んでたのよ。」

「姉さん……」

優さんは少し思案してから、私に言いました。

「遊園地ではちゃんと言えなかったけれど、僕は貴方のことが好きです。付き合ってください。」

時計の針が音を立て、鳥の鳴き声が続いて、私はゆっくり口を開きました。

「ぜ、ぜひおねがいします……」

佳恋さんは私達を見てにこやかに笑っていました。

「じゃあ、これは私からプレゼント。七夕に開かれるカップルハイキング参加券よ。」

「姉さん、なんでそんなものを…」

「もらったけど、私行かないから」

私はパンフレットに目をやりました。素晴らしい景色が広がる七夕村というところで、カップル限定のハイキングイベントが開かれるのです。私は心を躍らせました。

「とっても楽しみです!!」

初デートの裏で

私と優さんは七夕村という農村体験プログラムで有名な村を訪れました。特に七夕に開かれるカップルハイキングは村の人気イベントで、参加したカップルは幸せになれるといえます。私達は意気揚々と電車を降りて会場へと歩いていました。

しかし、そこで私たちは彼の人の姿を見つけてしまいました。彼は所属している経済学ゼミナールの合宿で七夕村に来ていたようなのです。彼の人は同じゼミナールのメンバーから離れ、勝手な行動をしていました。そんな彼の人と、私たちは遭遇してしまったのでした。

「お前：本間優？」

「五十嵐さん：！」

優さんの顔には焦りの色が見えました。

「お前、綾子と付き合ってるのか？」

「いや、あの…」

「俺の女に手を出して、ただで済むと思うなよ！」

私は五十嵐先輩の女ではないのですが、彼の人はかなりお怒りでした。それほどまでに優さんを嫌悪していらつしやるのでしょうか。いきなり彼の人は優さんを殴りました。

「どうせ俺の様子伺って手を出したんだろ。俺への復讐だと思っ
てんだろ」

優さんが草むらに倒れ込み、それを彼の人が殴り続けます。私は彼の人の腕を掴もうとしましたが、簡単に振り払われてしまいました。
た。

「違う！彼女のことはずっと好きだった。彼女を知らないのはあなたのほうだ」

「どういう意味だよ」

優さんの言葉に、彼の人は突然手を止めました。

「彼女は平井綾子なんて名前じゃない。彼女の本当の名前は…」

「五十嵐ーどこだー」

その時、経済学ゼミナールのメンバーが近づいてきました。こちらに気がついて走り出します。

「五十嵐、勝手な行動はよせ！」

ゼミ長らしき男子学生が彼の人の頭をこつんと叩きました。

「ちっ」

五十嵐さんはその手を払って走り去っていきます。ゼミのメンバー達もその後が続くように、軽く会釈をしたあと走り出しました。

「あ、あの…本間って？」

私が尋ねると、優さんは立ち上がって言いました。

「親が再婚して、姓が変わったんだ。高校時代は本間優だった」

「そうだったのですか。その、傷は…」

「平気だよ。さ、行こう」

そのあとの優さんは何となく覇気に欠けておりましたが、私たちは十分に七夕村でのハイキングを楽しみ、家路につきました。優さんは途中の駅ー大学前で下車し、私は終点まで乗りました。家に着く頃にはすっかり暗くなっていました。

「優！」

大学前駅で下車すると、駅前広場に悟の姿があった。

「呼び出して悪かったな」

「優が呼び出すなんて珍しいよな。何があった？」

「彼女のこと、平井綾子のことと話がある」

僕たちは悟の部屋で話を始めた。

「神楽鈴音？」

「それが彼女の本名だ」

「神楽って、まさか、あの…」

4月のはじめ、高速道路のサービスエリアで痛ましい事故が起き

た。居眠り運転の車がスピードを上げてサービスエリアに突っ込み、駐車中だった神楽一家の車に直撃、車が炎上。神楽鈴音はトイレにいて無事だったが、車の中にいた鈴音の両親と祖父母が亡くなったという。

鈴音は大学の入学式を控えた18歳。親類の家に預けられることになった。鈴音の父は有名アパレルブランドKAGURAの社長で、鈴音が会社を継ぐのかが問題だと報道されていた。最近ではぱったりニュースにも登場しなくなっていたが。

「彼女はきつと事故のことを忘れている。いや、忘れようと必死になっっているんだ」

優は声を絞り出した。

「本当に彼女が神楽鈴音なのか？」

「確証はないけれど、おそらくは…」

僕にとつて、平井綾子＝神楽鈴音という推測は、かなり確実なものになっていた。しかし、本人はそれを認めないし、誰も保証してはくれない。

「じゃあ、KAGURAの関係に当たってみようか」

「え？」

「前にうちの親父がオフィスの建設に関わったから。話できると思うよ」

「そっか、悟のお父さんって建築家だったね」

早速悟は建築家である父親に電話をかけ、神楽家とのスケジュール調整をしてくれた。数日後、僕はKAGURAのオフィスに招かれた。

「私が社長代理を務めている平井昌子です。前社長の妹に当たります」

「栖川優です。よろしくお願いします」

「よろしく」

僕は深く頭を下げながら、席に着いた。

「単刀直入に聞きますが、平井綾子さんは神楽鈴音さんなんですよ」

ね」

「その通りです。よくわかりましたね。」

昌子さんは驚いた様子でこちらを見ている。

「小学校時代の同級生なんです、僕」

「そうだったの。鈴音は意識を取り戻してからずっと、自分は平井綾子だと言い続けてるの。本来ならばあの大学でデザインの勉強をして、KAGURAの社長になるはずでした」

昌子さんはため息をついた。

「KAGURAは兄が一人で始めたこと。私は無関係と考えてきました。しかし、鈴音の居ない今、私しか仕事を出来る人間は居ないとにかく鈴音が戻ったときにすぐ仕事出来るように準備をしておくこと、それが私の仕事なんだと思っています。」

昌子さんは語り終えるとコーヒーを口にした。

「彼女はデザイナー志望だったんですか」

「ええ、演劇部の衣装係をずっとやっていたのよ。」

「そうだったんですか…」

「いま、鈴音は一時的な記憶喪失状態です。大きなショックを受けた場合にはよくあることだって言うし、私が責任を持って見守っていくつもりよ」

そこで僕は一番重要な質問をした。

「彼女の記憶が戻ることをお望みですか？」

「できればね…。鈴音にとっては辛い記憶だけれど、思い出さなきゃ。いつまでも平井綾子ではいられないと思うし」

「そう…ですね」

僕が言葉に迷っていると、昌子さんが口を開いた。

「それで、あなたはと思うの？」

「僕は…昔、彼女に助けられました。でも、そのことを今の彼女は覚えていない。あのお礼がしたいから…」

「そうだったの。」

昌子さんはにっこりと笑って僕の手を取った。

「なら、今度はあなたが鈴音を支えてあげて。お願いします。」
昌子さんが頭を下げた。僕は決心した。彼女に全てを思い出して
もらおうと。

Wデート決行

それは夏休みを目前に控えたある日のこと。

「デートしようよ」

優さんに誘われて、私は上機嫌でした。今回はかの有名なモデルであり、優さんのお姉様である佳恋さんも同行されるとのことです。巷で言うところのWデートで、佳恋さんのお相手はあの悟さんだと言います。優さんに淡い恋心を抱いた経験がありがたい悟さんですから、佳恋さんと上手くいつてほしいと願わずにはいられません。

佳恋さんの車に4人で乗り込み、目指したのは観光地として有名な銅爺湖。湖のほとりには温泉旅館が軒を連ねます。その宿の一つに悟さんが予約をいれたというのです。これは楽しみです。車は山道を走っていくつかの名所を通り、私たちは名物のお団子やら名産の果物などを買い求め、車内は大いに盛り上がりました。

宿は銅爺湖を一望できる高級旅館で、私は佳恋さんとお部屋を共にすることになりました。部屋に入ると二人で相談し、まずは露天風呂を目指しました。

「綾子ちゃんは、優のどこが好きなの？」

裸のつきあいありますから、こんな話でも盛り上がるのです。

私は恥ずかしい気持ちもありましたが、胸を張って言いました。

「うーん…一番は優しいところです！じゃあ佳恋さんは悟さんの…」

「私たち、今日が初対面よ」

「え、そうだったのですか？」

私は驚きました。てっきり悟さんと佳恋さんはお知り合いだと思っていたのです。

「優がどうしてもって言うから。でも彼いいわね」

「タイプってことですか？」

「そうね。諦めが悪そうな感じが何とも言えないわね」

佳恋さんはニヤリと笑っています。

「それって誉めてるんですか？」

「誉めてるわけないじゃない。男はけなしてナンボって思ってるからね。」

私たちはそうして、二人で思いっきり笑ったのでした。

夕食は海の幸、山の幸のフルコース。見たこともないような豪華な料理に私は驚きました。お酒は飲めませんが美味しい果実ジュースも頂きました。一人お酒を飲んで酔った佳恋さんは強引に悟さんを連れてカラオケに行ってしまうました。

「僕たちはどうする？」

「私はデザートが食べたいです」

「じゃあ、あっちのお店に行ってみようか」

私たちがデザートを食べ終えて部屋に戻ったときには、佳恋さんも悟さんもいらっしやいませんでした。お二人がお戻りになったのは、夜も遅くなってからなのでした。

そんな楽しい一夜を過ごし、帰路は高速道路。サービスエリアを巡るのが最近のブームだそうで、特におすすめというサービスエリアで昼食をとることを目標にしておりました。私はそのサービスエリアで不思議な光景を目にしました。サービスエリアの一角にたくさんの花束が積まれていたのです。

「どうしてこんなにたくさんさんの花束が…？」

「ここで事故があつたんだよ。6人も死んだんだ」

悟さんが言いました。

「6人も…それは大変痛ましいことです」

「KAGURAってブランド知ってるか？その社長一家がね。」

「KAGURA…？」

私は突然の眩暈に、立っているのも辛くなってしまいました。思わず優さんの肩を掴みました。

「神楽って…？」

優さんは何も言いませんでした。悟さんは不機嫌そうに顔をしかめています。一呼吸おいて優さんが言いました。

「小学生の頃…僕の初恋の相手は神楽鈴音さん、あなたでした」

「神楽鈴音？」

立てないほどの眩暈に襲われた彼女を見てサービスエリアに待機していたKAGURA関係者たちが近づいてきた。そうしているうち、とうとう彼女は意識を失った。彼女をベンチに座らせると、主治医が軽く診察をした。

「問題ないですよ。ちよつと刺激が強すぎたかもしれませんが。今日は家に帰しましょう」

「でも心配だわ。こんな状態で一人なんて
そう言ったのは姉さんだった。

「優、泊めてやれよ」

悟も続ける。

「姉さん、今日は僕の部屋で彼女と寝てくれないかな。僕は悟のマンションに行くから」

「優もそばにいてあげなさいよ。そうだ！どうせなら悟くんも一緒に泊まるうよ」

「姉さん！？」

「俺は賛成だぜ。みんなで泊まれば怖いもの無しだ。」

悟は僕を裏切って姉さんサイドについた。

「じゃあ、四人で…」

渋々提案を受け入れて、僕たちは帰路についた。

目覚めの時

目が覚めたのは夜中の二時過ぎでした。どうやら優さんのアパートのようです。部屋には四人分の布団が敷き詰められ、隣には佳恋さんがすやすやと寝ています。その隣に優さん、そしてなぜか悟さんまでもが寝ていました。これはパジャマパーティーなのでしょうか？

そんな冗談は置いておいて、私は神楽鈴音なる人物について調べることになりました。優さんの初恋の相手であり、サービスエリアの事故に関係しているといえます。

たしか優さんの部屋のリビングには卒業アルバムがあるはずですが、そこを見れば手がかりがあるかもしれません。私は小学校の卒業アルバムを取り出しました。しかし、クラスの名簿に神楽鈴音という名前はありません。仕方なく卒業アルバムを仕舞おうとした時、挟まっていた写真が落ちました。

それは小さい頃の優さんと、私によく似た女の子のツーショットでした。女の子の胸には「神楽鈴音」の名札がありました。

「これが神楽鈴音さん……」

私にはそっくりですが、こんな写真を撮った記憶はありません。きっと人違いなのです。世の中には自分と同じ顔の人間が三人はいるとか、聞いたことがあります。優さんは勘違いをしているのでしょうか。

突然、ドアの開く音がしました。

「見たの？」

優さんは言いました。

「見ました……でも私ではありません」

そう告げると、優さんは何も言わずに寝室へ戻っていきました。神楽鈴音とは、何者なのでしょうか？

「あー」

隣室で悲鳴をあげたのは悟さんでした。

「優、寝ぼけてんじゃねえよ！」

しかし、優さんの声はしません。しばらくバタバタと音がして、タバコとライターを持った悟さんが部屋から飛び出してきました。

「あ」

悟さんは箱から取り出したタバコをすつと戻してこちらを向きましました。

「起きてたんだ。」

「はい」

「吸ってもいい？」

「構いませんが…何かあったのですか？」

「寝ぼけた優に思いつきり足を踏まれたんだよ。マジ痛っ」

悟さんは踏まれた足をさすっています。

「優さんは寝ぼけてらしたんですか？」

「何言っても起きないからな。面倒だからタバコ吸いにきた」

言い終えて悟さんはタバコを吸いました。

「なんだ、その写真」

「これは小学生のころの優さんのようです」

「へえ。隣、お前じゃないの？」

悟さんが指をさしたのは神楽鈴音さんです。

「これは神楽鈴音さんです。私ではありません」

「ふうん。そっくりさんってやつか？」

「そのようです」

「俺にはそうは見えないけどなあ」

悟さんは首をかしげました。

「え？」

私は思わず声を上げました。

「神楽鈴音イコール平井綾子、俺はその説が有力だと思うぜ」
「そんなわけありません」

私は首を振りますが、悟さんは納得しない様子でした。

「優はずっと神楽鈴音を探してた。俺が本間優って女の子の存在を信じてたみたいに」

「…悟さんは名字が違ってても、優さんのことに気づいたのですか？」
「気づいたよ。先に気づいたのは俺の方だ。その分ショックも大きかったけどな」

悟さんは即答しました。そして続けて言いました。

「優は名前が違ってても神楽鈴音だって見抜いた。すごいことだと思わないか？」

「じゃあ、もし私が神楽鈴音だったとして…私はどうしたら神楽鈴音に戻るのでしょうか？」

そこが問題なのです。わたしが神楽鈴音だったとしても、今の私にはその記憶はありませんし、それを取り戻す術も知らないのです。それでも悟さんは動じませんでした。

「人間、変わろうと思えば変われるもんだ。って、優が言ってたぜ」

クローゼットに仕舞い込まれた女性もののスーツ。輝く高級アクセサリ。佳恋さんの写真が載っている女性誌。それを眺める私の心に、ある想いが浮かんできました。

——栖川優という魅力的な人を、もっと輝かせるにはどうしたらよいのでしょうか？

「どうした？」

しばらく考え込んでいた私に、悟さんが声をかけてくださいました。

「私、家に取りに行きたいものがあります」

「は？」

「バイクに乗せてください」

「…わかった。行こう」

悟さんは、何かを察知したようでした。そして、ポケットからバイクの鍵をとりだしてみせました。暗闇の中を家に帰り、私は愛用の裁縫道具を持ち出しました。ピンク色のミシンは特別にお気に入りなのです。夜の明ける頃、優さんの家に帰り、私はクローゼットの中にあつたスーツにハサミを入れました。もっとも魅力的なものになくはなりません。高級ブランドのタグを外し、私は裁縫箱にあつたタグを付けました。「S・KAGURA」、それが私のブランド名。やっと、思い出したのです。

「いけない、今日は1コマだから家に戻るわ」

作品の完成を見届け、悟さんは席を立ちました。

「ありがとうございました、悟さん」

「おう、優によろしくな」

「はい！」

悟さんが帰ってしばらくすると、優さんが目覚めました。

「おはようございます、優さん」

「おはよう。起きてたんだ」

優さんはまだ眠そうで、目をこすりながらこちらへ歩いてきます。

「はい、今日大学に着ていくスーツです」

「S・KAGURA・・・これは・・・」

タグの文字を見て、優さんは目を見開きました。

「急いで作りました。きつと似合うと思いますよ」

「ありがとう、神楽鈴音さん」

男性仕様のスーツを身に纏った優さん。私はお気に入りKAGURAブランドのワンピースを着て、神楽鈴音として歩き出しました。二人で正門をくぐると、五十嵐先輩が近づいてきました。

「本間…？」

「栖川優ですよ、先輩」

優さんは笑って答えます。彼の人は呆然と立ちつくしていました。
「あれって、神楽鈴音じゃない？」

「KAGURAの次期社長よ。テレビで見たことある」

そんな注目を受けながら、私たちは知らん顔をして校舎に入りました。もう私たちは不安や秘密に振り回されることなどありません。堂々と生きればよいのです。

「人間、変わろうと思えば変われるものですね」

私が言うとう優さんはとびっきりの微笑みを返してくださいました。
「小学生の頃いじめに遭って泣いていた僕に、転校生だった鈴音さんが言ったんだよ。変わろうと思えば変われる、だから泣いてちゃだめだって」

「それで私のことを覚えていてくださったのですね」

「そういうこと」

「よかった、覚えていてくださって。ここに帰ってこれで、良かった」

私は優さんの手を取って、大学の廊下を闊歩することに決めました。

「行きましょう！」

これから神楽家の立て直しに忙しくなることでしょう。家族を亡くした悲しみはまだ癒えていないのが事実です。しかし、私には素晴らしい仲間が出来ました。仲間と協力して進んでいけばきっと道は開ける。これは、そう信じさせてくれる出来事なのでした。

新たな一歩

KAGURAの新社長就任会見、そして新作発売の記念となるイベントに、二人の美しいモデルが登場した。一人はモデルとして有名な栖川佳恋。そしてもう一人は佳恋の弟・優。ちよい役ではあるが舞台俳優として活動している現役大学生。そしてKAGURA新社長の婚約者でもある。

「KAGURAは亡き父の目指した”着る人を輝かせる衣料”を目標に、更なる進化を続けて参ります。まだまだ勉強中の身ではありますが、精一杯皆様のご期待に応えて参りますので、よろしく願います」

「お疲れ様、鈴音」

スピーチを終えた私に、優さんが声を掛けてくださいました。私のデザインしたジャケットがよくお似合いで、とても嬉しい気持ちです。

「優さんこそ、お疲れ様でした。佳恋さんもうありがとうございます」

「鈴ちゃんのためだもの、ノーギャラだったとしても仕事を受けるわ」

佳恋さんは肩を露出した大胆なロングスカートで、とても美しいお姿です。そこに走ってきたのは悟さんです。汗をかいた手で図面を握りしめています。

「新店舗のデザイン、できたぞ」

「ありがとうございます」

「本当に俺でよかったのか？一応親父が全部見てくれたんだけど。」
建築士である悟さんのお父様と、建築について勉強中の悟さんのコラボ作品は、とても先進的な仕上がりです。

「素敵です。開店が楽しみですね！」

今、鈴音は社長として新しい商品のデザインや、新店舗の設計に大忙しだ。元々父親の仕事を手伝っていた鈴音だから、衣類のデザインは得意だ。客からの受けもいい。新店舗の設計は建築士である父親の監督のもと悟が担当。僕と姉さんはモデルとして協力している。

「悟くん、仕事が終わったなら飲みに行きましょうよ」

「佳恋さん、俺は未成年だけど」

「未成年のくせにタバコ吸うな」

姉さんが悟の煙草を取り上げる。最近お決まりのパターンだ。

「タバコは男の嗜みなんだよ」

悟は煙草を取り返すが、姉さんも負けてはいない。

「どうせ酒も飲んでるでしょ、つべこべ言うな！」

するとそんな二人の間に鈴音が割って入った。にこにこと笑って、悟の方を向く。

「私知ってますよ。そのタバコ、偽物なんですよね！」

「偽物？」

姉さんが大声を上げた。僕もその言葉に驚いた。

「鈴、それを今バラすな！」

「嘘っ、てつきり本物だと思ってたわ」

「本物吸ってたらとくに捕まってるさ」

悟が隙を突いて偽物の煙草―禁煙者向けのハーブ煙草に火を付ける。

「そうかしらね。単に老けて見えるだけじゃないの？」

姉さんは悟の肩をつかんで離さない。

「優、佳恋さんを何とかしてくれ」

「自業自得だよ、悟じいさん」

僕も調子に乗って言っちゃった。悟はいじられキャラが向いていると思う。

「優のヤロー！」

悟は地団駄を踏んでいた。今、悟と姉さんは付き合っているらしい。いや、悟は姉さんに付き合わされてるのだ。まあ、何だかんだで二人の関係は良好のようだから、いいだろう。但し、悟のことを兄さんと呼ぶのだけはゴメンだ。

「わかったわよ、悟おじさん。これから私が美味しい抹茶カフェに連れて行ってあげる。はやく準備して」

姉さんは悟の腕を引張っている。

「俺が抹茶苦手なの知ってますよねえ」

「知ってるに決まってるじゃない」

姉さんはにこやかに笑っているが、悟はと言うとたじたじだ。

「佳恋さんってSなんですか？」

「栖川だもの」

「イニシャルの話じゃない！」

悟は顔を赤くしてつつこんでいる。なんだかんだでお似合いの力ツプルだ。

「鈴音は仕事に戻る？」

「今日は帰ります。そうだ、皆さんで焼き肉パーティーなんてどうですか」

「賛成！抹茶より焼肉にしよう。」

真っ先に悟が手を挙げた。

「じゃあ行きましょう！KAGURA新作発表会のお祝いです！」

「って、何で俺の家なんだよー」

会場は悟さんの部屋にしました。悟さんの部屋はとても広いのですから、こういう機会に使わなければ宝の持ち腐れです。

「早く焼けよ、悟じいさん」

「そうよ、悟くんが焼かないと私たち食べられないんだから」

「みんなで焼けばいいじゃないか。鈴も説得してくれ。」

「社長命令です、悟くんが全部焼いてください。」

「ひどい、みんな揃ってSだ」

「鈴音ですから」

「だからイニシャルの話じゃないって。それに、もしイニシャルの話なら、俺だって悟だからSじゃないか」

「悟さんのSはカウントしてません」

「なんでだよー！」

そう言いつつ、悟さんはとても美味しく焼き肉を調理してくださいましたから、私たちは満足していました。

「ほら、食べ。食べよ！俺の飯が食べないっていうのかー」

「悟くんもSだなあ」

完全に佳恋さんは酔っぱらい、私たちも楽しくてしょうがないその夜を精一杯に楽しんだのでした。明日からまた、忙しくなります。しかし、このメンバーならば何でも乗り越えていけるでしょう。

さあ、真夏の太陽の下を堂々と闊歩いたしましょう。

登場人物紹介（前書き）

ここでは登場人物を紹介します。ネタバレもあります。

登場人物紹介

私 わたし

優秀大学人間学部の一年生。堂々と大学のキャンパスを闊歩する一風変わった女の子。義理人情に厚い。自称「平井綾子^{ひらい あやこ}」、本名「神楽鈴音^{かぐら すずね}」。綾子モードでは童顔で服装は子供っぽく、ネックレス代わりに自宅のカギを首に下げるなど、おおそファッションブランドの次期社長とは思えないセンスである。

「設定」

身長 150cm

体重 45kg

髪型 ショートボブ

服装 原色系のワンピース

趣味 裁縫と読書

栖川 優 すがわ ゆう

優秀大学人間学部の一年生。入学当初から美人と噂になり、今では大学のアイドル。実は男。演劇部のエース。桐原悟は幼稚園、高校時代のクラスメート。

「設定」

身長 185cm

体重 55kg

髪型 ストレートのロング

服装 ドレスシャツに黒のパンツ

趣味 サイクリング

桐原 悟 きりはら さとむ

優秀大学工学部一年生。優の友人。煙草好きだが、実は偽物である。高級マンションに住み、バイクを乗り回す。両親とも建築家。

隠れ鉄道オタク。腕にはいつも大きな金属製の腕時計とリストバンドをしている。

「設定」

身長 175cm

体重 62kg

髪型 ショート

服装 ポロシャツにジーンズ

趣味 テニス

栖川 佳恋 すがわ かれん

25歳。優の姉。有名雑誌の専属モデル。

「設定」

身長 170cm

体重 ヒミツ

髪型 黒のストレートロング

服装 有名ブランドの最新作のドレス

趣味 弟で遊ぶ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8053n/>

堂々乙女と秘密の美女－記憶の中のあなた－

2010年10月8日12時12分発行